

「東南アジア史 10 講」(古田元夫著 岩波新書)の紹介

野本久夫

はじめに

日本 AALA が「戦争するな! どの国も 国際署名」に取り組んで今年で7年目です。「国際署名」を直接 ASEAN 議長国へ届ける「日本 AALA ツアー」を毎年 11 月頃に行い、既にマレーシア(駐日マレーシア大使館:東京)、ラオス、フィリピン、シンガポール、タイを訪問しました。外務省などの担当者に「署名」を提出し、懇談してきました。コロナ禍でベトナム、ブルネイの両国を訪問することはできませんでした。

古田元夫先生の新著について

「東南アジアを知るための第一歩 古代から現代まで、世界史との関連もふまえた通史」(帯)として本書が今年 6 月 18 日に出版されました。著者は東大教授を経て、日越大学学長、東大名誉教授です。ベトナム地域研究を専攻し、ベトナムに関する多くの書を著しています。日本ベトナム友好協会の会長です。

全体の構成

10 の講義の形をとって、第 1 講「青銅器文化と初期国家の形成」、第 2 講「中世国家の展開」、第 3 講「交易の時代」、第 4 講「東南アジアの近世」、第 5 講「植民地支配による断絶と連続」、第 6 講「ナショナリズムの勃興」、第 7 講「第二次世界大戦と東南アジア諸国の独立」、第 8 講「冷戦への主体的対応」、第 9 講「経済発展・ASEAN10・民主化」、第 10 講「21 世紀の東南アジア」になっています。

1. 「東南アジア」の共通性

各講の大まかな紹介ですが、第 1 講で、「東南アジアは、今日の国家でいえばミャンマー、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム、マレーシア、シンガポール、インドネシア、東ティモール、ブルネイ、フィリピンの 11 カ国で構成され、東ティモールを除く 10 国カ国は ASEAN の加盟国で、ASEAN は、東南アジアとしてのまとまりを国際政治の舞台で誇示している。…ASEAN が東南アジア全域を包摂するようになるのは、1990 年代のことで、それまでの東南アジアは、まとまりを欠く地域だった」と述べ、東南アジアを知りたくさせる書き出しで始まっています。「まとまりのない」東南アジアを結ぶ共通性として、稲作農業と海域に形成された洋の東西を結ぶ交易ネットワークをあげています。7 世紀に巨大な中国市場が出現し、東西交易が活性化してきたのです。

10~11 世紀以降、東南アジアには中世国家群が登場し、その背景には例外的要因があったとしイスラム帝国を背景にムスリム商人の活道の活発化、中国の宋が統一して交易活動が大きく発展してきたことをあげています。(第 2 講)

15 世紀後半から 17 世紀前半は世界的な景気拡大の時代で、東南アジアの交易も発展し、

東南アジア史では「交易の時代」と呼ばれ、スペイン、ポルトガル、オランダ、イギリスなどのヨーロッパ勢力による大航海時代になったとしています。そして東南アジア各国の様子を述べています。(第3講)

2. 欧米列強の進出とナショナリズムの芽ばえ

18世紀から19世紀前半にかけての東南アジアは「近世」として再評価する流れが定着してきているとして、中国清とイギリスの進出をあげています。多くの「華人」が東南アジアに進出し、現地化も進行しました。第4講ではこの時代の東南アジア各国を国別に詳述しています。

19世紀後半から20世紀前半、第二次世界大戦の終結まで東南アジアはシヤムを除いてほぼ全域が欧米諸国の植民地支配下におかれました。資本主義が世界体制となって帝国主義の時代を導いたとし、この列強間の抗争が2つの世界大戦を招いたのです。オランダ、イギリスの進出は本格化しました。(第5講)

第6講では、ナショナリズムを「欧米列強の国民国家の原理によって組織された国家による支配は、やがて支配された人々の間にも、自らの国民国家を持つという希求を育てることになった。これが、ナショナリズムである。」と述べています。ここでは中国、マレーシア、ビルマ、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオスのナショナリズムを国際共産主義運動とのかかわりも含めて述べています。

3. 東南アジア民族主義の「3つの道」

第7講では、複合的な性格を帯びた第二次世界大戦をファシズムと反ファシズムという対抗軸と、植民地従属国の民族解放との関係でみると、東南アジアのナショナリストの選択肢として、以下の3点をあげています。

「反ファシズムが人類的な最重要課題であると考え、反ファシズム陣営に属する宗主国への戦争協力を行い、その中で自己の地位向上をはかる道」、「植民地宗主国に対する独立闘争を重視し、宗主国および植民地政権に戦争をしかけている日本というファシズム勢力と手を組む道」「ファシズム勢力への協力もしないが、反ファシズム陣営に属する宗主国の戦争にも協力しない道」。

ここでは日本植民地支配とビルマ、タイ、ベトナム、インドネシアの対応を述べています。ビルマのアウンサンとインドネシアのスカルノの役割を述べています。また、インドシナ戦争を詳述しています。

4. ベトナム戦争と東南アジア

第8講ではベトナム戦争をラオス、カンボジアへの波及も含めて詳述しています。「開発独裁」という言葉を耳にしますが、それについてもタイ、フィリピンを例にして説明しています。第二次世界大戦後、タイは「東南アジアの開発主義の先駆的な存在となり、『開発独裁』とも呼ばれる強権政治を実施した」、フィリピンでも開発独裁は行われたが、強権政治に対する批判が高まったのです。

第二次大戦後、「東南アジアの人々自身の間でも、この地域枠組みのなかに自らを位置付ける試みは、第二次世界大戦後、比較的早期から存在していた」と述べ、その先駆けともいえる1947年に結成された「東南アジア連盟」(Southeast Asian League)、1961年結成の「東南アジア連合」はともに加盟国の対立で機能しなくなりました。

5. ASEAN 結成とその意義

1965年からのマレーシア紛争は「地域の安定のためには善隣関係が不可欠であることを、各国に強く印象付けていて、1967年、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア、シンガポール、タイの5カ国の代表が集まり、ASEANを新機構としてASEAN独立宣言に調印。これは「ASEANは反共軍事同盟として結成されたのではなく、善隣関係の構築を目指したことが重要であり、そのことが、後にASEANが東南アジア10カ国を包摂する組織に発展しえた要因だった。」

第9講は冷戦体制の崩壊からポスト冷戦期の東南アジア各国を詳述し、開発独裁の終焉と改革の模索を述べています。ベトナムのドイモイにも言及しています。

最後の第10講はグローバルな課題と東南アジアの今後を述べています。1999年にASEAN10が成立し、21世紀に入り中国、アメリカ、日本がASEANに積極的にアプローチしていてASEANの存在感を増大させています。著者は、「中国の台頭と米国の覇権の衰退の中で、東南アジア・東アジアでの米中の競合と対立が激化しているが、こうした状況のもとでは、この地域の統合の中心的役割をいずれの大国が握ろうとしても、関係諸国間での合意は成り立ちにくい。むしろ、他国にとっての安全保障上の脅威になることが少ないASEANが地域協力推進の『運転席』に座っているという構図のほうが受け入れやすいものである」と述べており、「ASEAN自身も『ASEANの中心性』と呼んで重視している」のです。この講では今年2月のミャンマーの軍事クーデター、ロヒンギャ問題も述べています。

6. ASEANの今後と日本のあり方

最後に、「結びにかえて — コロナ禍と東南アジア」の中の次の文章を紹介します。「中国が感染抑止に成功したことから、危機管理にとっては、民主主義的統治よりは一党支配のような強権体制のほうが有効であるという認識が生まれている。東南アジアに即してみると、この議論の妥当性はあまり高くないと筆者は考えるが、2021年2月にクーデターを起こしたミャンマーの軍部などは、こうした風潮の影響を受けているとも考えられよう。」

「コロナ禍でEUの統合モデルの問題が露呈している中で、ASEANはコロナ後の世界にEUとは異なる地域統合のモデルを提示することができるだろうか。ASEAN諸国の多くが独立から一世紀を迎える二一世紀半ばまでの歩みが注目される。そして、こうした東南アジアに対して、日本は、発展途上国と援助供与国という関係ではなく、より『対等のパートナーシップ』を築くことが、強く求められていると言えるだろう。」

多くの方がこの本を読まれてはいかがでしょうか。